

大学生の自己愛人格傾向と自我状態との関連

著者	小西 瑞穂, 山田 尚登, 佐藤 豪
雑誌名	滋賀医科大学雑誌
巻	21
号	1
ページ	4-8
発行年	2008
URL	http://hdl.handle.net/10422/111

大学生の自己愛人格傾向と自我状態との関連¹⁾

○小西瑞穂²⁾³⁾ 山田 尚登²⁾ 佐藤 豪⁴⁾

²⁾滋賀医科大学精神医学講座 ³⁾同志社大学文学研究科 ⁴⁾同志社大学文学部

Mizuho Konishi¹⁾²⁾ Naoto Yamada¹⁾ Suguru Sato³⁾

¹⁾ Department of Psychiatry, Shiga University of Medical Science

²⁾ Graduate School of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University

³⁾ Department of Psychology, Faculty of Letters, Doshisha University

Abstract: In recent years, narcissistic personality is seen as a trait especially among young people. This personality trait has an ambivalent feature that unsettled self-valuation easily influenced by others, while it is energetic and a self-centered, being filled with confidence. In this research, we examined the relationship between narcissistic personality and five ego states -critical parent (CP), nurturing parent (NP), adult (A), free child (FC), adapted child (AC), using the Ego-gram. Moreover, in order to consider the relevance to narcissistic personality and mental health, we measured depression as a negative side of mental health and subjective happiness as a positive side. The results showed that CP, A and FC increased narcissistic personality. CP reflected the authority, dominant and exclusive characteristics. A reflected cool and not confused attitude by the others' feeling. FC reflected the less consideration for others and selfish behavior. From these results, this study confirmed the features of the narcissistic personality more clearly. Finally, the subjects with high narcissistic personality had lower depression and higher subjective happiness than the subjects with low narcissistic personality. The narcissistic personality was supposed to be the factor to enhance the mental health.

Keywords: narcissistic personality, ego-state, depression, subjective happiness

【目的】

特に近年、青年を中心に見られる自己愛人格傾向とは自信に満ち、エネルギーで自己本位的な態度が目立つ一方で、他者評価によって自己評価が容易に揺らぐといったアンビバレントな特徴をもつ人格特性の一つである。Kernberg (1975) は病的な自己愛の特徴として、過度の自己陶醉、強大な野心、誇大的空想、賞賛への過度の依存、栄光や権力・美への強い欲求などを挙げ、これらの特徴は他者を受容する能力や共感性の欠如、慢性的な空虚感、他者に対する搾取などの形で明らかになると述べた。また、Raskin & Hall (1981) は健常者の自己愛人格傾向について、DSM-III (APA, 1980) に記載されている自己愛性人格障害 (Narcissistic Personality Disorder) ほど極端な行動特徴ではなく、病的な行動傾向を持たない自己愛人格特性が正常者の中で認められると述べた。近年、自己愛人格傾向について多くの研究が報告されており、これまでの研究から、自己愛人格傾向にはエネルギーで外向的、自信が強く、自己本位、競争的・攻撃的で、共感性が乏しい(宮下, 1991)という側面と、不安定な自己像を有している(小塩, 2001)という矛盾した側面があることが明らかになっている。

しかし、これまでに自己愛人格傾向と個人の思考や行動・感情のパターンを規定する自我状態との関連を

検討した研究は見あたらない。そこで、本研究ではエゴグラムを用いて、批判的親(Critical Parent;以下 CP)、養育的親(Nurturing Parent;以下 NP)、成人(Adult;以下 A)、自由な子ども(Free Child;以下 FC)、順応した子ども(Adapted Child;以下 AC)の各自我状態と自己愛人格傾向との間にどのような関連があるかを探索的に検討する。CP とは責任感やリーダーシップの強さ、NP とは共感性や他者肯定の構え、A とは合理的・論理的な判断力、FC とは感情や欲求の自由な表現力、AC とは周囲に適応していく従順な自我状態である。これらの自我状態は、個人の行動パターンや対人関係における交流パターンを理解する時に用いられることが多く、エゴグラムを用いて測定される。エゴグラムとは各自我状態のエネルギー量を測定することを目的に作成されたもので、Dussay(1977)は「それぞれのパーソナリティの各部分同士の関係と、外部に放出している心的エネルギー量を棒グラフで示したもの」と定義している。そこで、本研究ではエゴグラムを用いて自我状態を測定し、自己愛人格傾向との関連を検討することで、自己愛人格傾向の側面をさらに明らかにすることを目的とする。

さらに、自我状態と自己愛人格傾向との関連から精神的健康に与える影響を検討するために、精神的健康のネガティブな側面を抑うつ、ポジティブな側面を主

¹⁾ 本研究は平成 19 年度科学研究費 (若手研究(B)課題番号 19730429)「自己愛人格傾向のストレス対処過程における基礎的・臨床的検討 介入に向けて」の研究補助を受けた。

観的幸福感として測定する。抑うつを測定する理由は、小西・山田・佐藤（印刷中）が男性の自己愛人格傾向の高い者にストレスが多く加わると抑うつ反応を示しやいと報告していることが挙げられる。また、この点については小塩（2005）も同様に、自己愛人格傾向の高い者の中に対人ネガティブイベントを多く経験した際に抑うつの感情を抱きやすい群があることを報告している。さらに、市橋(1999)が自己愛性パーソナリティ障害の患者の受診理由について、抑うつを主訴としたものが多いことを指摘しており、自己愛人格傾向の延長上に自己愛性パーソナリティ障害が存在すると考えた場合、自己愛人格傾向の高い者が抑うつのになりやすいことが考えられる。次に、主観的幸福感を測定する理由については、小西・山田・佐藤(2007, 印刷中)が自己愛人格傾向と人間の精神生活についてのトータルな意味での積極的なよい状態を表す概念であるハピネス(吉森, 1994)との間に正の相関関係が認められることを報告しており、ハピネスと関連が深いと考えられる主観的幸福感を測定することで精神的健康のポジティブな側面を測定できると思われる。また、島井・大竹・宇津木・池見(2004)は主観的幸福感とうつ症状との間に負の関連があることを報告している。

以上より、自我状態と自己愛人格傾向との関連を検討することで、自己愛人格傾向の構造をより明らかにすると共に、自己愛人格傾向が抑うつや主観的幸福感といった精神的健康を支える要因にどのような影響を与えているのかを検討したい。

【方法】

調査協力者 回答に不備のなかった大学生 266 名(男性 105 名、女性 161 名)を調査対象とした。平均年齢は 21.44 歳($SD=2.97$ 歳)であった。

質問紙 1.Narcissistic Personality Inventory - 35 (以下 NPI-35): 小西・大川・橋本 (2006) が自己愛人格傾向を測定する目的で、Raskin & Terry (1988) の NPI を邦訳し、検討を加えて作成した NPI-35 を用いた。この尺度は 35 項目で、「注目欲求」「誇大感」「主導性」「身体賞賛」「自己確信」の 5 因子構造を成しており、十分な再検査信頼性と因子的妥当性及び構成概念妥当性が確認されている。回答方法は「全くあてはまらない (1 点)」から「非常にあてはまる (6 点)」までの 6 件法であり、項目の合計得点が高いほど自己愛人格傾向が高いことを示している。なお、本研究では包括的に自己愛人格傾向の高低が精神的健康に与える影響について検討するため、下位尺度レベルによる分析は行わないこととした。なお、本尺度の Cronbach の α 係数は .934 と十分な信頼性が認められた。2.新版東大式エゴグラム(以下 TEG; 吉内・山中・佐々木・野村・久保木・末松, 2000): エゴグラムは Berne(1961)の交流分析理論を基礎にして、臨床場面における応用を視野に入れて作成された自我機能を分析するための検査で

ある。CP、NP、A、FC、AC の 5 つの自我状態が測定できる。全 55 項目から成り立っており、「はい (2 点)」「どちらでもない (1 点)」「いいえ (0 点) の 3 件法で行った。得点が高いほど、各自我状態が高いことを示している。3.自己評価式抑うつ性尺度(Self-Rating Depression Scale;以下 SDS;Zung, 1965): 抑うつを測定する目的で、福田・小林(1973)が作成した日本版 SDS を用いた。全 20 項目に対し、「ほとんどない (1 点)」から「ほとんどある (4 点)」の 4 件法で行った。得点範囲は最低 20 点から最高 80 点であり、数値が高いほど抑うつのであることを示している。4.日本版主観的幸福感尺度(Subjective Happiness Scale;以下 SHS;島井ら, 2004): 本尺度は 4 項目から構成されている。それぞれ項目文に対応した 7 件法の回答方式用意されており、本研究も島井ら(2004)を参考に 7 件法で行った。なお、本尺度の Cronbach の α 係数は .766 であり、ある程度の信頼性が認められた。

手続き 調査は滋賀県内 A 大学の医学科第 5 学年および看護学科第 1 学年、京都府内の大学の文学部第 3 学年の学生を対象に、各学科および学部の必修講義時間中を利用し、集団法で行った。調査期間は 2005 年 4 月～2006 年 3 月であった。

倫理的配慮 調査協力者に対しては口頭および書面にて、研究の目的と内容、本人の意志により調査協力の撤回が随時可能であること、得られたデータは研究目的以外の目的で使用しないことを説明し、署名にて同意を得た。また、データは個人が特定できないよう保管・統計処理を行い、研究結果については後日公開することを伝えた。なお、本研究は滋賀医科大学倫理委員会の承認を得て実施された。

統計分析 各尺度の平均値および標準偏差を算出した後、NPI-35 得点の高低によって各自我状態および SDS、SHS に違いが見られるかを検討するために 1 要因の分散分析を行った。次に、各自我状態と自己愛人格傾向、SDS、SHS との関係を検討するために各変数間に仮説的な因果関係を想定し、重回帰分析によるパス解析を行った。

【結果】

各尺度の平均値、標準偏差を表 1 に示した。

	平均値	標準偏差
NPI-35	106.85	24.94
CP	10.56	4.49
NP	14.13	3.98
A	10.72	4.78
FC	12.90	4.00
AC	11.03	4.51
SDS	40.08	7.77
SHS	19.48	4.17

自己愛人格傾向の高さの各自我状態および SDS、SHS の比較 自己愛人格傾向の高さによって、各自我状態得点に違いが見られるかを検討するために 1 要因

の分散分析を行った(図1, 図2)。NPI-35については、全調査協力者の中で NPI-35 得点の高い 25%の者を高群(67名)、NPI-35 得点の低い 25%の者を低群(66名)とした。なお、NPI-35 得点の平均値および標準偏差は高群が 139.58 点($SD=13.46$ 点)、低群が 76.65 点($SD=9.96$ 点)であった。

その結果、CP($F(1, 131)= 105.75, p < .001$)および NP($F(1, 131)= 5.39, p < .05$)、A($F(1, 131)= 49.51, p < .001$)、FC($F(1, 131)= 32.79, p < .001$)において、NPI-35 高群が低群よりも高い各自我状態得点を示し、特にその差は CP および A、FC において顕著に認められた。AC($F(1, 131)= 18.71, p < .001$)については、NPI-35 高群が低群に比べて得点が低かった。次に、SDS($F(1, 131)= 11.79, p < .01$)において NPI-35 高群が低群に比べて有意に低い得点を示し、SHS($F(1, 131)= 16.41, p < .001$)においては NPI-35 高群が低群に比べて有意に高い得点を示した。

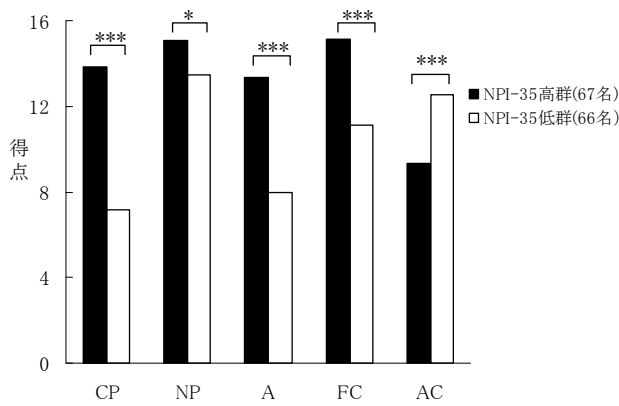


図1. NPI-35高群・低群における各自我状態得点

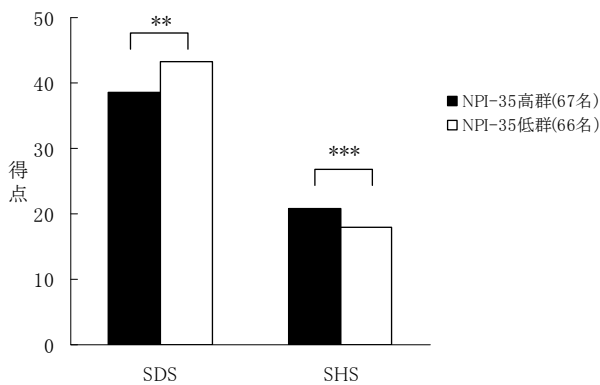


図2. NPI-35高群・低群におけるSDS, SHS得点

仮説モデルの検討について 各自我状態と自己愛人格傾向、SDS、SHS との関係を検討するために各変数間に仮説的な因果関係を想定し、重回帰分析によるパス解析を行った。有意であったパスとパス係数を図3に示した。自己愛人格傾向には CP および A、FC の自我状態がそれぞれ正の影響を与えており、特に CP の影響が最も強かった。次に、自己愛人格傾向を媒介せずに、CP および AC が正の影響を、FC が負の影響を直

接的に SDS に与えていた。SHS にも同様に自己愛人格傾向を媒介せず、FC が正の影響を、AC が負の影響を直接的に与えていた。

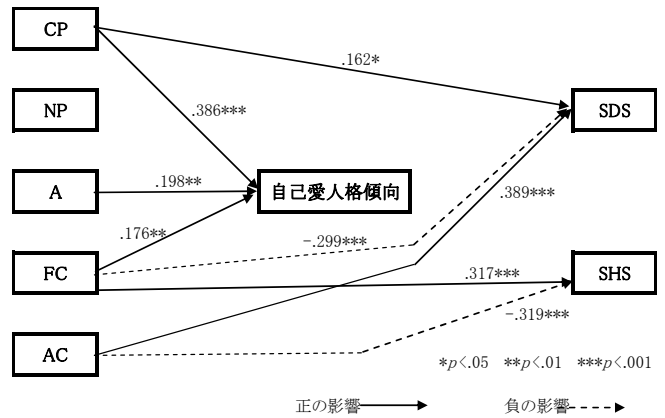


図3. 各自我状態と自己愛人格傾向、精神的健康との関連

【考察】

自己愛人格傾向の高い者は低い者に比べて、CP および NP、A、FC の各自我状態が高く、AC が低かった。つまり、自己愛人格傾向の高い者はその特徴として、厳格で、責任感が強く(高 CP)、現実的・効率的に物事を処理する(高 A)傾向が挙げられる。また、自由奔放で感情をストレートに表現しやすく(高 FC)、協調性に乏しく、融通の利かない面がある(低 AC)一方で、世話好きな面(高 NP)もあるということが明らかとなった。しかし、本研究では自己愛人格傾向の高い者が低い者よりも有意に共感性と強い関連を持つ NP が高いという結果が得られた。これまでの研究では自己愛人格傾向と共感性の間に負の相関関係が報告されており、DSM-IV-TR(APA, 2002)の自己愛性パーソナリティ障害の診断基準の一つにも「共感の欠如」が挙げられており、本研究の結果とは異なる特徴がこれまでに示されている。この相違については、自己愛人格傾向の中心的特徴である自分自身に対する強い肯定的感覚が、回答に影響した可能性がある。この自己愛人格傾向の強い自己肯定感については、小西・山田・佐藤(2007)が非現実的にポジティブに捉えられたものであることを指摘しており、自己愛人格傾向の高い者が回答を共感性の高い方向へ歪めた可能性がある。また、この点については自己愛人格傾向の高い者の各自我状態は全て高く、これは自己愛人格傾向の高い者の心的エネルギー量が高いことを示唆しており、その影響で NP が高くなっているとも考えることができるだろう。

次に、自己愛人格傾向の高い者は低い者に比べて抑うつ度が低く、主観的幸福感が高い状態にあることが示され、自己愛人格傾向の高い者は精神的健康状態が良い状態にあることが示唆された。これは小西・山田・佐藤(2007)からも示唆されているように、自己愛人格傾向の高い者は個人内における精神的健康状態が高いと言える。

さらに、パス解析により、CP および A、FC の各自

我状態が自己愛人格傾向を向上させることが明らかとなった。自分の意見を通そうとする特徴を示す CP が自己愛人格傾向を促進するという点に関しては、NPI-35 の下位尺度に自分の意見や考えを全面的にはっきりと表出しようとする積極的な態度を示す「主導性」が含まれていることが関連していると考えられる。また、CP の権威的、支配的、排他的な側面や A の冷淡で他者の感情に惑わされないといった特徴、FC の他者の配慮に欠け、自分勝手な行動を取りやすいといった特徴との関連は共感性の欠如を指摘したこれまでの先行研究を支持するものであり、自己愛人格傾向の特徴がより明らかとなったと言える。

しかし、自己愛人格傾向から精神的健康への有意なパスは認められず、自己愛人格傾向が精神的健康を向上あるいは低下させる影響は本研究からは認められなかった。

最後に、本研究の限界について言及したい。本研究では大学生全般についての特徴を検討するために、様々な学科の大学生を対象に調査を行っているが、調査協力者の人数は十分ではなく、大学生の一般的な特徴と言及するには限界がある。従って、今後調査協力者をさらに増やし、現代青年の特徴とも言える自己愛人格傾向の検討を進めていきたい。

【引用文献】

American Psychiatric Association 1980 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Third Edition: DSM-III*. Washington, D. C. : Author.

American Psychiatric Association 2002 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Forth Edition Text Revised: DSM-IVTR*. Washington, D. C.: Author.

Berne, E. 1961 *Transactional Analysis in Psychotherapy*. New York: Grove Press.

Dusay, J. M. 1977 *Egograms: How I see you and you see me*. New York: Harper & Row.

市橋秀夫 1999 強迫症状と自己愛性人格構造 精神科治療学, **14**, 835- 842.

福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.

Kernberg, O. 1975 *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jacson Aronson.

小西瑞穂・大川匡子・橋本 宰 2006 自己愛人格傾

向尺度(NPI-35)の作成の試み パーソナリティ研究, **14**, 214-226.

小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 2007 自己愛人格傾向と Positive Illusion との関連からみた精神的健康同志社心理, **54**, 7-18.

小西瑞穂・山田尚登・佐藤 豪 印刷中 自己愛人格傾向についての素因-ストレスモデルによる検討 パーソナリティ研究.

宮下一博 1991 青年におけるナルシシズム(自己愛)的傾向と親の養育態度・家族の雰囲気との関係 教育心理学研究, **39**, 455-460.

小塩真司 2001 自己愛傾向が自己像の不安定性,自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44.

小塩真司 2005 自己愛傾向と対人ネガティブライフイベントに対する反応 人文学部研究論集(中部大学), **14**, 183-190.

Raskin, R. & Hall, C. S. 1981 The narcissistic personality inventory: alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, **45**, 159-162.

Raskin, R. & Terry, H. 1988 A principal components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 890-902.

島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見 陽 2004 日本版主観的幸福感尺度(Subjective Happiness Scale: SHS)の信頼性と妥当性の検討 日本公衆衛生雑誌, **51**, 845- 852.

吉森 護 1994 ハッピーネスに関する心理学的研究(4)ーハッピーネスと社会的関係の関連ー 広島大学教育学部紀要(心理学), **43**, 115- 123.

吉内一浩・山中 学・佐々木 直・野村 忍・久保木富房・末松弘行 2000 新版 TEG の開発 交流分析研究, **25**, 159- 165.

Zung, W. W. K. 1965 A Self-Rating Depression Scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

要約 自己愛人格傾向とは、近年青年を中心に多く見られる人格特性の一つであり、自信に満ち、エネルギーで自己本位的な態度が目立つ一方で、他者評価によって自己評価が容易に揺らぐといったアンビバレントな人格特性である。そこで、本研究では自己愛人格傾向と個人の思考や行動・感情のパターンを規定する自我状態との関連を検討し、自己愛人格傾向の側面をさらに明らかにすると共に、それらが精神的健康に与える影響について検討した。その結果、厳格で、責任感が強く、現実的・効率的に物事を処理する傾向や、自由奔放で感情をストレートに表現しやすく、協調性に乏しく、融通の利かない面がある一方で、世話好きな面もあるということが明らかとなった。また、自己愛人格傾向の高い者は低い者に比べて抑うつ度が低く、主観的幸福感が高い状態にあることが示され、自己愛人格傾向の高い者は精神的健康状態が良い状態にあることが示唆された。

キーワード：自己愛人格傾向、自我状態、抑うつ、主観的幸福感